

人を対象とする医学系研究に関する情報の公開

倫理委員会番号	2022-059
研究課題名	男児分類不能型鎖肛に対する手術方針と術後排便機能
所属科	小児外科
研究責任者	中田光政
研究期間	承認後～2023年12月31日
研究概要	<p>1) 【背景】男児鎖肛分類不能型は1999年の直腸肛門奇形研究会の報告では1183例中26例(2%)と少なく、症例報告も散見されるのみで、病態や手術方針は明らかなものはありません。</p> <p>2) 【目的】当院症例における男児分類不能型鎖肛症例に対する手術方針と術後排便機能について検討を行いました。</p> <p>3) 【対象と方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1989年から2022年までに当院で手術を受けた方、男児分類不能型鎖肛7例 ● 病態、手術、合併症、排便機能(直腸肛門奇形研究会の臨床的評価法)について後方視的に検討しました。 <p>4) 【結果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 病型 Rectopenile urethral fistula (RPUF) が2例、 Rectopenile cutaneous fistula (RPCF) が1例、 Anopenile urethral fistula (APUF) が1例、 Anoscrotal cutaneous fistula (ASCF) が3例 a. 人工肛門は4例に造設されました。 b. 直腸盲端の位置は4例が中間位、APCFの3例は低位でした。術前の尿路・直腸造影ではRPUF、RPCF、APUFの4例に尿路と交通を認めました。 ● 手術 術式はRPUFでは会陰式1例、後方矢状切開1例、RPUFでは後方矢状切開が1例、APUFとASCFでは会陰式アプローチでした。瘻孔処理は可能な限り切除した症例は1例、直腸盲端から1cm以内に処理した症例が6例でした。 ● 手術合併症 瘻孔を切除した1例に尿道損傷を認めた。遺残瘻孔が長い症例が4例あったが、remnant of the original fistulaに関連する合併症は認めませんでした。 ● 排便機能 術後7-10年における排便機能は8点4例、6点が1例、5点が1例、不明が1例でした。 <p>5) 【考察】手術時の瘻孔処理では、初期の1例で瘻孔処理を可能な</p>

	<p>限り行い尿道損傷を認めた。以降は長く瘻孔は残ることを許容しており、それによる長期合併症は認めなかったため、尿道損傷のリスクを考慮すると瘻孔処理は尿道損傷を避けるために直腸盲端またはその近傍で行うことが望ましい。また、直腸盲端が中間位の症例を含め術後排便機能は良好であると考えられました。</p> <p>6) 発表・報告場所、日時、発表雑誌名など 第 60 回日本小児外科学会学術集会 2023/6/1-3 大阪国際会議場</p>
倫理的配慮・個人情報の保護の方法について	<p>本研究のすべての担当者は、「ヘルシンキ宣言」及び「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施します。</p> <p>研究の結果を公表する際は、対象者を特定できる情報を含まないようにします。また、研究の目的以外に、研究で得られた情報を使用しません。上記の研究に情報を利用することをご了承いただけない場合は、研究の問い合わせ先までご連絡ください。この調査へのご自分の診療録の使用をお断りになっても、不利益を受けることは全くありません。いつでもお断りいただけますので、担当医あるいは下記にお申し出ください。</p>
研究の問い合わせ先	<p>千葉県こども病院 小児外科 中田光政 〒266-0007 千葉県緑区辺田町 579-1 TEL: 043-292-2111</p>
結果の公表について	<p>個人情報を消去した上で、集計されたデータのみを国内外の学術集会・学術雑誌などで公表します。</p>
利益相反について	<p>本研究の計画、実施、発表に関して可能性のある利益相反はありません。</p>